

《温故知新プロジェクト》

紬と紡ぎ

—結城紬にみる手つむぎの特徴とファイバーアートへの展開—

岡本 恵* 大木 敦子*

Pongee and Spinning

—Characteristics of Yuuki Pongee and Fiber Art—

Megumi OKAMOTO, and Atsuko OOKI

1. 緒 言

1) 目的

結城紬は日本に数ある紬のなかでも製糸段階で、人の手による「手引き」、という方法に特徴がある。素朴であり、軽く、柔らかな風合いはほかに類を見ない。

つむぎ糸の風合いは、どのように生まれるか、機械紡績との違いの検証と他の繊維での試作を通し、古くから受け継がれてきた技術の伝承の中からヒントを得て、ファイバーワークのマテリアルとして作品展開を試みることを目的とした。

重要無形文化財（1956）ユネスコの無形文化遺産（2010）に指定された本場結城紬の条件は

1. 糸はすべて真綿からの手つむぎ糸であり、強撚糸でないこと
2. 緋は手くびりによること
3. 地機で織ること

以上3点がすべて使用されていることとなっているが、本研究では手つむぎ糸に注目した。

2) 背景

結城紬の産地は茨城県結城市と栃木県小山市周辺に広がっている。古事記や日本書記にも麻・穀・桑を作すると記述されている。

二毛作の穀倉地帯として、気候風土に恵まれ、農業の盛んな地域である。養蚕も盛んに行われ、長らく農閑期の副業として発展してきた。また、この地域には鬼怒川が流れており、昔は絹川、または衣川とも呼ばれていた。現在でもこの周辺の地域には、絹や桑といった地名が残っている。

結城紬は分業で生産されている。糸とり、緋くくり、紺屋（染色）、機屋と分かれている。糸とり、織などは女性の仕事で、家で作業をする間、結城の男性は家事をよくしていた。

絹糸は繭の繊維を引き出して作られるが、生糸を引き出せない品質のくず繭をつぶして真綿にし、糸を紡ぎだしたものが紬糸である。くず繭には、玉繭（2頭以上の蚕が一つの繭を作ったもの）、穴あき繭、汚染繭が含まれる。

中世以前より、現在の常陸太田周辺から広まり、常陸紬が結城紬として残っていった。悪絹＝絶と書くようになり、源氏物語にも朝廷に貢もの「東絶」と記述されていることから、古くからつむがれてきたものと思われる。江戸時代になると贅沢禁止令が出された折に、高価な絹物を着ることが禁止されたが、絹の着用を認められなかった富裕な町人たちは、絹を着ることを諦めずに「遠目からは木綿に見える」ということで工夫され、絹であるのに木綿と言いつ張り、好んで着るようになったという説もある。

色合いが渋い上に、絹なのに光沢を持たない、さりげなく趣味の良さを主張できる粋な反物として人気を博した。

そのため需要が増え、農村の若い女性にとっては大切な収入源となった。

2. つ む ん

1) つむぎのことは

つむぎを表す言葉の違い

紡ぐ spin（紡ぐ）とは綿や繭を捶む（つむ）にかけて、繊維を引き出し、撚りをかけて糸にする。

績む（うむ）麻・苧（からむし）などの繊維を細く長くつなぎ合わせ糸にする。苧麻などが例に挙げられる。

紬 pongee（つむぎ）繭から糸を引き出す。紬という漢字の旁（つくり）の由は象形文字で、中からものを引き出す、撚るという意味がある。

2) 結城紬の手つむぎに見られる特徴 pongee

糸つむぎをする動作を、「糸を引き出す」という。手前に引き出してつむいでゆく。軽くひねりながら引き出し、もう片方の手の指で唾を付けながら固めていく。この時、唾に含まれている様々な酵素のアミラーゼが糸をコーティングしていく。結城の手紡ぎは手元でひねりを加え、常に回転

* 東京家政大学（Tokyo Kasei University）

がかかることはないので、出来上がりは無撚糸の状態になる。この無撚糸であるという事が、軽く暖かい風合いの仕上がりに繋がっている。



写真1 つくし

3) ほかのつむぎ方

繊維に撚りをかけながら紡ぎ機へ巻き取られていく。撚りをかけるといことは、常に繰り出した糸が回転していなければならないので、紡ぎ機側へ、手前から「糸を出していく」感覚になる。回転数をあげれば、強く張りのある切れにくい丈夫な糸ができる（写真2、3）。



写真2 スピンドル



写真3 手紡ぎ機

3. 結城紬ができるまで

1) 行程

繭5～6粒から袋真綿が1枚できる。袋真綿1枚をつくしにかけ、手で糸を引き出し、糸をつくっていく。袋真綿50枚をつむぎ、おぼけと呼ばれるつむいだ糸を入れる桶に入れ、1杯が1ボッチになる。1ボッチをつむぐのに上手な人で7～10日かかる。1ボッチは長さ4～5 km 380～1,000デニールでつむぐ。1反の必要量は7～8ボッチ（35～40 km）経糸4ボッチ20 km、緯糸3～4ボッチ（15～20 km）必要となる。

この他に手括りによる糸括り5,000カ所／日、染色を施し、括った糸をぼどくなど機に糸をかけ、織るまでも長い月日と多くの手間が費やされる。

2) 手順

①糸つむぎ（写真4）→②管巻き→③総あげ→④図案作成→⑤整経→⑥墨付け→⑦拵括り（写真5）→⑧叩き染め→⑨糊付け→⑩地機織り（写真6、7）→⑪糊抜き

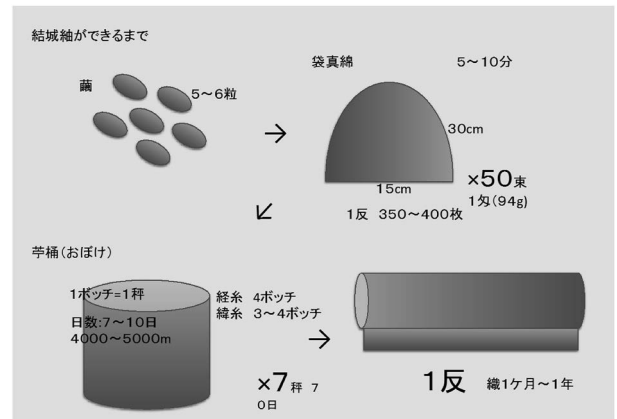


図1



写真4



写真5



写真6

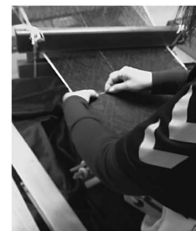


写真7

3) 糸つむぎ

袋真綿をひらき、広げつくしと呼ばれている道具に袋真綿をかけ、糸をつむいでいく。つくしに使用されるキビガラは昔は馬の飼料として使用されてきたが飼料の改善が進み、栽培も減少し現在では入手困難になってきている。

袋真綿は現在では結城紬の産地ではほとんど生産されておらず、多くを福島県の伊達市の入金真綿から買い入れている。この、袋真綿づくりにも熟練の技が必要で、よい糸とつむぐには均等に引き延ばされた上質なものが欠かせない。

写真1の袋真綿は最上級のものではなく、ところどころにムラがあるのが見受けられる。

一反の布を織るのに袋真綿350～400枚が必要になる。



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13

4. 真綿と他の繊維の混紡比較実験

1) メリノウールのトップとシルクを混ぜたものを、つくしにかけてつむいでみた。ウールは繊維が短いため切れやすく、このつくしを使用してのつむぎ方ではウールが多いほど太くつむがないと糸にならなかった。また、シルクが多いほど、糸にコシが出た。

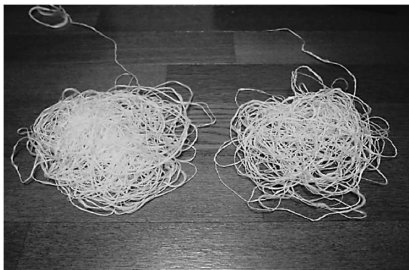


写真14

左 シルクウール（シルク50：ウール50）
右 シルクウールに更に真綿状のシルクを混ぜたもの

2) シルクとウールの割合を変えたものは糸として成り立つにはある程度のシルクが必要であることがわかった。シルクのスケールとウールのスケールの大きさが違うことから繊維が絡みづらいと考えられた。

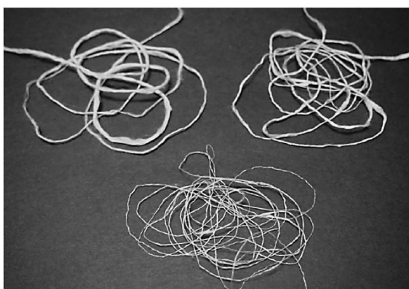


写真15

左 シルクウール（シルク50：ウール50）
右 シルクウール（シルク70：ウール30）
中 シルク真綿（シルク100）
＊ ウールはメリノトップ

5. ファイバーアート制作

糸をつむぐ実践を経て、ファイバーアート制作を試みた。

1) 大木敦子

「光の集め方」

シルクとウールの素材の違いに着目して、制作した。空間を利用して展示することで、透け感の違いや、テクスチャーの変化を表現した。



写真16

素 材：メリノ原毛・シルク

技 法：フェルト

サイズ：180×180 cm

ギャラリー find spin 展

平成26年11月25日～11月30日

「つなぐ」

スピンドルで手紡ぎした糸を使用し制作した。繭から糸が引き出される様や、色々な要素が集合して一つの物事を形成していく様子を表現した。



写真17

素 材：シルクウール
技 法：スピンドル手紡ぎ
サイズ：130×200×60 cm
ギャラリー find spin 展
平成26年11月25日～11月30日

「惑星のかげら」
経年と朽ちていくものをテーマに制作した。フェルトの制作段階で縮む性質と、ミシンワークでの縫い縮みを利用して、凹凸のあるテクスチャーをつくりだした。



写真18

素 材：ロムニー原毛
技 法：フェルト、ミシンワーク
サイズ：125×185 cm
第78回新制作展
平成26年9月17日～29日

2) 岡本 恵

「WA・KU」
生糸にする際、糸口を見つける作業が必要になる。その時ブラシについたものをキビソ（生皮苧）といい、まゆ



写真19

の外側を糸にしたものを使用した。湧き出るエネルギーとワクワクする気持ちを表現した。

素 材：絹キビソ・大麻・水溶性ビニロン・藍染
技 法：ニッティング
サイズ：20×50×30 cm
クラフトで乾杯2014展
札幌芸術の森工芸館
平成26年7月5日～8月31日

「…そして風になる」
生糸をとり終わった繭玉の内側の皮巣をシルクキャリアと言う。幅1.5 cm 長さ15 cm 位からなるシルクキャリアを 薄くはぎ、縫い合わせた作品。風にたなびく命のかたちといつかは消える生命体を表現した。



写真20

素 材：絹キャリア・ナイロンミシン糸・膠
技 法：オリジナル
サイズ：130×80×50 cm
ギャラリー find spin 展
平成26年11月25日～11月30日

「stand a while」
素材や色彩に力強い張りりと、深みを持たせるために、シルクやリネンの異素材の細い糸を染色し、20本引き合わせ縫いをかけ太糸を作成した。その良さを生かすためにバスケットウィーブという特徴のある糸を効果的に見せる織技法を使用し、幅150 cmの幅広の織機で継ぎ目のない一枚の布を織った。時や季節が走馬灯のように過ぎていくのを佇みながら見ている様子を表現した。



写真21

素 材：絹糸・ラミー麻・綿糸・ステンレス線
技 法：バスケット織・編物・化学染料・柿渋染
サイズ：170×80×70 cm
ギャラリー find spin 展
平成26年11月25日～11月30日

6. 紬とツイードの比較と共通点

結城三代、祖母から母へ、母から娘へと受け継がれて着るものとされる。結城は丈夫で、着るほどにしなやかさを増し、風合いが良くなっていく。(写真22、23) これは英国伝統のハリスツイード(写真24)にも共通するものがあり、親子3代で受け継ぎ、雨風にさらされて、くたくたになってこそ味が出ると言われている。ツイードは、丈夫で粗く厚い織物、これもまた手紡ぎ、手織りの「ホームスパン」の生地が原型となっている。

機械紡績ではない二つの織物が、国は違いますが共に永く愛され、受け継がれ、製法も守られているという共通点、そして元々野良着であったこと、農家の副業として始まり、発展してきたという背景もまた共通する部分である。



写真22

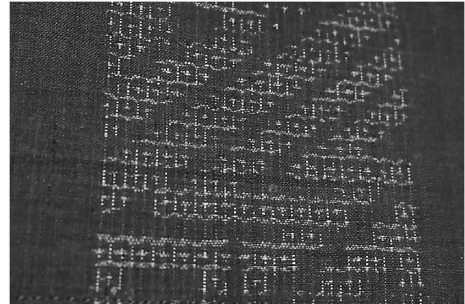


写真23

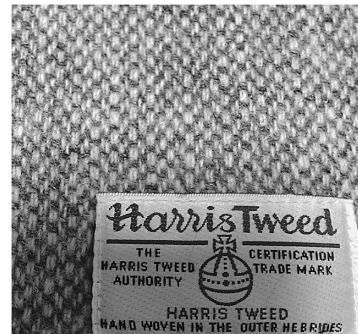


写真24

7. 考 察

結城紬の背景や、歴史を調べていて気づいたこと、それは速くできたもの、スピードのあるものに、「心地よさ」は伴われにくいのではないかということ。素材の良さを引き出す制作行程が必ず存在する。結城紬の真綿や糸と向き合うことは、自身の作品制作においても素材に向き合うことを気づかされた。素材に関心を持つこと、そこにある物語を考え、作品制作実践していきたい。

人が心地よいと感じるものや空間は時代を越えても変化しないのではないかと思う。重要無形文化財という肩書きや、結城紬＝高級織物という既成の概念ではなく、手で触れて素直に感じる素材の良さから今後のアピールの方法が見いだせるのではないか。

また、子どもたちに素材に触れさせたり、楽しい体験をさせたりすることを積極的に教えてみたい。幼少期に得た豊かな経験は長い人生の中で、折に触れ思い出し伝統の復活、故郷を思い出すきっかけとなるであろう。

生活の中に取り入れ、身近に感じ、愛着を持ち文化を継承していきたい。